



# Shirleyにおける飼い慣らされた動物の表象：作家とgeniusの流動的な主従関係

著者	古野 百合
雑誌名	英米文学
号	64
ページ	19-33
発行年	2020-03-15
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10236/00029766">http://hdl.handle.net/10236/00029766</a>

# *Shirley* における 飼い慣らされた動物の表象

——作家と *genius* の流動的な主従関係——

古 野 百 合

**Synopsis:** Displacement has been considered the keyword of Marxist and Feminism criticism of *Shirley*. I would like to apply this trope to the image of tamed animals in this novel. Displacement can be seen not only in a relationship between a master and a pupil, Charlotte's obsession, but also in that between a writer and a genius: a Godlike existence that controls a writer's creativity appeared in Shirley's French *devoir* in a chapter originally titled, "La Cheval dompté" ("The Tamed Horse"). Drawing also on the relationship between Emily and her beloved mastiff, Keeper, I argue that the repeated images of taking control of each other, taming and being tamed, shows the mobility of relationships.

## 序 論

シャーロット・ブロンテ (Charlotte Brontë, 1816-1855) の『シャーリー』(*Shirley*, 1849) の 1980 年代以降の批評的関心は *displacement* (置き換え, すり替え)<sup>1</sup>にある。例えば, *Myths of Power* (1988) においてテリー・イーグルトン (Terry Eagleton) は, 当時のイギリス社会を揺るがす支配階級内部の対立と労働組合運動の高まりによって起こったチャーティスト運動から, 40 年前のより明白なラダイト運動 (機械うちこわし運動) へと問題点がすり替わっているとした。階級闘争を扱ってはいるが, 関心の中心は労働者階級にあるのではなく, 支配階級内部における構造的矛盾が浮き彫りにされていると主張した。また, サンドラ・ギルバートとスーザン・グーバー (Sandra Gilbert and Susan Guber) も, 紡績工場の機械化により職を失った男性労働者階級のダブルとして, 父権社会から抑圧された中産

階級の孤独な女性が重ね合わされていると評した。つまり、男性労働者階級の問題が女性中産階級が抱える問題に置換されているのだ。さらにスザンヌ・キーン (Suzanne Keene) は、“woman-Titan” (女性の巨人) に象徴される女領主としての力強い女性が物語の後半では「誰かに支配されたい」少女像に置き換えられている “displace” (116) とした。

これらの先行研究を踏まえて本稿では、小説のテーマが置換にあるとする批評の流れを踏襲し、飼い慣らされた動物の表象を検証しながら、主と従が入れ替わる関係性を明らかにする。『シャーリー』においては、工場長と労働者、領主とその庇護にある労働者などシャーロットの代表的モチーフの一つである主従関係が重奏されつつも、主と従が入れ代わる二つの関係性が描かれている。一つは、作家自身が主となって、自身が抱える文学的創作意欲や感情を制御するという意味でのメタフィクション的な主従関係、つまり作家と **genius** (創作活動を司る神的存在) との関係である<sup>2</sup>。シャーロットは創作活動において、一方では **genius** に主人の座を奪われないようにその情熱を手懐けつつ、もう一方では彼に創造力を羽ばたかせ、その支配下となる余地を与えた。そして小説には直接描かれていないもう一つの主従関係として、シャーリーのモデルであるとされているエミリー・ブロンテ (Emily Brontë, 1818-1848) と愛犬キーパーとの関係がある。本小説においてシャーリーとルイの関係は、「獰猛な野獣とその飼い主 (**keeper**)」(439) という動物とその飼い主の主従関係に何度も喩えられる。果たして、飼い主としての “**keeper**” (512) はエミリーの愛犬 **Keeper** に重ね合わされないだろうか。生徒と家庭教師の関係から、雇い主とその使用人の関係、そこからまた獰猛な動物とその飼い主の関係へと、シャーリーとルイの主従関係は幾度も入れ代わる。この振り子のように揺れる主従関係がエミリーと愛犬の関係 (**keeper** / **Keeper**) に暗示されるように、お互いを主人とし、互いに飼われている関係を示唆することから、彼らの主従関係は固定化したものではなく、流動する可能性を秘めている。

## 1. “La Première Femme Savante” における主従関係 －作家と genius

3 巻 4 章に登場するシャーリーのフランス語の作文 “La Première Femme Savante” (「最初の女学者」) は、とりわけフェミニズム批評において争点となる要素を含んでおり、多くの批評で取り上げられている。2 巻 3 章に登場する、女領主としての力強い女性のイメージを象徴する “woman-Titan” (女性の巨人) と、3 巻 4 章に登場する「誰かに支配されたい」少女像との間にギャップがあり、シャーリーの性格描写において非一貫性が認められるからである。しかし、シャーリーが娘時代に書いたこの作文に秘められているのは「誰かに支配されたい」少女像だけでは当然ない。この作文を別の観点から見つめなおし、シャーロットの創作活動における想像力とそれを自ら抑制するという意味での主従関係を読み取りたい。

「最初の女学者」は 17 世紀フランス古典劇の代表的な作家であるモリエール (Molière, 1622-1673) の『女学者』(*Les Femmes savantes*, 1672) からタイトルを付けたと推測されている (Gezari 565)。ちなみにこのような作文課題は *devoir* と呼ばれ、シャーロットがベルギーに留学中、フランス語教師コンスタンタン・エジェより多くの *devoir* を課された。『女学者』の筋書きは娘の婿選びを巡って夫婦が対立した末、ハッピー・エンディングで幕を閉じるという喜劇である。フィラマントは裕福な町人である夫を尻に敷く傲慢な中年女性であるが、彼女の知的好奇心は旺盛で、文学、歴史、倫理、そして天文学や物理学にまでに及ぶ。彼女は「男性が女性を蔑視し、不当にも低い地位に置き、また女性の才能を、取るに足りぬ仕事ばかりに向けさせ、崇高な学問の扉を閉ざしていることにたいし、断固として復讐しようと思う」(モリエール 286)。一方、家事を差し置いて教養を身につけたがる妻に対し、「スープの加減がどうなっているか」(268) については全く知らないと夫は嘆く。

モリエールの『女学者』において描かれている女性の知識欲は、シャー

リーが娘時代に書いた作文の中では「知性の炎 “the flame of her intelligence”」(407)として描かれている。しかし、モリエールのエコーはこれだけで、両親と死別し部族から見捨てられた「孤独な若い野生の娘」は、「知性の炎」が燃え盛る最中に瀕死の状態に陥る。力を振り絞って天に救いを求めると、神のような存在が彼女の叫びに応じて「イーヴァ」と語りかけ、「主よ」と娘は叫ぶ。神が創造した最初の女性、イヴと創造主である神とのやり取りと思いきや、主は “Seraph, on earth named Genius” (408) と自らを称して娘を救済しようとし、娘は花嫁として自分自身を捧げようとする。

“My glorious Bridegroom! True Dayspring from on high! All I would have, at last I possess. I receive a revelation. The dark hint, the obscure whisper, which have haunted me from childhood, are interpreted. Thou are He I sought. God-born, take me, thy bride!” . . . Such was the bridal-hour of Genius and Humanity. (408)

シャーリーの作文に登場するイヴは、蛇によって結婚の絆を断ち切られ、死に瀕するが、花婿である Genius によって支えられ天国へと運び込まれ、不滅の冠を授けられることになる。ギルバートとグーバーは、*The Madwoman in the Attic* (1984) において、アダムの代わりに登場する父なる神のような存在である Genius を 6 章では “a Byronic/Satanic god of the Night. . . . a male muse” (209) と呼び、11 章では “a male master” (394) と呼ぶ<sup>3</sup>。一方初期作品のグラスタウン物語において、ブロンテ姉妹弟は『千夜一夜物語』に登場する魔神たちから着想を得て自らを「守り神 (genii)」(岩上 57) と称し、初期作品の舞台であるアフリカ王国とそこに住む人々の運命を司る超自然的な力を具現化させた<sup>4</sup>。シャーロットの初期作品研究の第一人者であるクリスティーン・アレグザンダー (Christine Alexander) は genii に言及して次のように述べている。

There are four Chief Genii. They are the Brontë children themselves, who control the course of events and the movements of their particular characters, originally the wooden soldiers but now, in 1829, imaginary people whose world has been committed to paper. (30)

シャーロットの「守り神の長 (Chief Genius)」は Talli と呼ばれ、初期作品における守護者また預言者の役割をなした (Alexander 31)。これら天才、詩神、魔神、守り神に共通するものは、作家としての創造的エネルギーを具現化したもの、物語の「創造主」である。

シャーリーの作文である「最初の女学者」は出版社のウィリアム・スミスの指摘によって読者に配慮して英語に書き換えられたが、もともとはフランス語で書かれたものであった。加えて3巻4章のタイトル “The First Blue-Stocking” は、もとの原稿では “La Cheval dompté” (“The Horse Tamed” 「飼いならされた馬」) であった。このタイトルは、ジャック＝ベニーニュ・ボシュエ (Jacques-Bénigne Bossuet, 1627-1704) の作品名から取ったものであり、恩師エジェが *devoir* として抜粋を書き取らせたとされている。ボシュエは上下関係を認識できた馬を制御不能な馬と対比させ、(馬の) 熱情は破壊されたのではなく、制御されたとした (Lonoff, Introduction 73)。留学時の作品において、*dompté* (飼いならされた) という語は繰り返し登場するとし、スー・ロノフ (Sue Lonoff) は次の様に指摘する。

She [Charlotte] wanted to reconcile genius with humanity, to find a means of synthesizing ardor and restraint, the flash of inspiration and reflection. . . . Dompté. . . became, for her, a symbol of productive regulations, of control that leaves the energy of genius unimpaired while directing it precisely and truthfully. (Lonoff, Introduction 74)

つまりシャーロットは創作活動において自身が主となり、自らに潜む **genius** (天才, 詩神, 魔神, 守り神) を飼いならす必要性を感じていたと解釈できよう。<sup>5</sup> “**La Cheval dompté**” (「飼いならされた馬」) が象徴するように, 「最初の女学者」には作家と制御が困難な **genius** という主従関係が潜んでいるのだ。作家は, 創作活動を司る **genius** の情熱を手懐けつつ, もう一方では彼の創造力を羽ばたかせ, 支配されることも厭わない。言い換えれば, 作家と **genius** がその支配関係において入れ代わることを示唆している。この「飼い慣らされた馬」はルイとシャーリーのフランス語のレッスンにおいても再び登場し, 獐猛なシャーリーがルイによって飼い慣らされていく過程が描かれる。

## 2. シャーリーとルイの支配関係

ルイ・ムーアが登場するのは, 物語の約三分の二に入った 2 巻 12 章「夕べの外出 (“**An Evening Out**”)」である。ルイはシンプソン一家の家庭教師として家族たちにつかず離れず, 「衛星 “**satellite**”」(381) のような存在として働いている。威厳をもって家族は接してくれるが, 彼を一人の人間としては見ていない。それはアン・ブロンテ (**Anne Brontë, 1820-1849**) の『アグネス・グレイ』(**Agnes Gray, 1847**) においてアグネスが経験した孤立と似ている。アグネスは雇い主のみならず, 生徒からも不当な扱いを受けたが, ルイは足の不自由な生徒ヘンリーから慕われ, 彼も生徒を愛していた。そしてヘンリー以外でルイが愛していたものはシャーリーの愛犬, 獐猛なターターだけであった。シャーリーはかつての家庭教師であったルイと再会しても, シンプソン夫妻や娘たちと同様, 彼の存在はほとんど目に入っていなかった。しかしヘンリーを介して二人の関係は少しずつ縮まっていく。

3 巻 4 章に登場するシャーリーの作文「最初の女学者」はルイが求愛するための道具として利用した点でも重要である。ルイが少女時代のシャーリーのフランス語の作文を暗唱する場面に境に, シャーリーの女相続人としての

采配ぶりやリーダーシップは徐々に薄れ、シャーリーそのものが衰え、衰弱する (Keene 116)。暗唱の後、ルイはシャーリーの気を引くためにフランス語のレッスンをを行い、彼女に教師と生徒というかつての主従関係と呼び起こさせる。錆びついてきているシャーリーのフランス語を矯正するために、ルイは手本の後に復唱させて発音を正すことによって、シャーリーは大人から生徒へと後戻りさせられている。こうして、シャーリーは娘時代の自分を呼び覚まされ、大人として成長した自分の足場を失っていく。ルイがかつてシャーリーに課題として暗唱させたボシュエの「飼い慣らされた馬」を、ルイの朗唱に続けて、彼の発音どおりに、表情までも再現して復唱をする。その後、今度はシャーリーがルイに、ボシュエと並ぶ古典主義作家ラシーヌ (Jean Racine, 1639-1699) の “Le Songe d'Athalie” (「アタリーの歌」) を暗唱するようにせがむ。

He said it for her ; she took it from him ; she found lively excitement in the pleasure of making his language her own : she asked for further indulgence ; all the old school-pieces were revived, and with them Shirley's old school-days . . . and then [he] had heard the echo of his own deep tones in the girl's voice, that modulated itself faithfully on his. . . well recited by the tutor, . . . and the pupil had animatedly availed herself on the lesson. Perhaps a simultaneous feeling seized them now, that their enthusiasm had kindled to a glow, which the slight fuel of French poetry no longer sufficed to feed ; . . . (413)

この場面は、この小説の中で一番エロティックな場面であるとも読み取れる。ルイがシャーリーの心を掴むためには、過去の思い出にすがるしかなかった。しかも教師と生徒という師弟関係においてしか、彼はシャーリーに対して優位に立てない。この上下関係を思い起こさせるがために、ルイの朗唱とシャーリーの復唱が何度も何度も繰り返される。相手の発音や区切りや表



情までを全てコピーして復唱する，というのは一種の洗脳のようにもあり，まるでマインドコントロールされるかのように，シャーリーはルイの元へと引き込まれていく。この二人の濃厚なフランス語のレッスンの後，教師と生徒が教室での禁断の愛に陥り，人目を憚ってその場から逃げるかのように二人はそれぞれ別々の扉から出ていく。

前章でも取り上げた「飼い慣らされた馬」における馬と主人の主従関係は，生徒と教師の主従関係に置き換えられる。すなわち，制御不能なシャーリーは主人であるルイに徐々に「飼い慣らされて」いくのだ。このどちらか一方が相手を飼い慣らすイメージは3巻4章以降，二人の関係を象徴するものとなる。

ルイはシャーリーを動物に例えて「雌獅子／雌豹／鷹／野獣」などと呼び，飼いならして彼女の愛を勝ち取ろうとする。実に，この小説では *lioness*, *leopardess*, *merlin*, *pantheress* などの雌の猛獣，猛禽を表す単語が合計8回出てくるが，その全てがシャーリーを指している。小説全体を見ると，*lioness* が3回（439, 506, 512），*leopardess* が4回（439, 522），*merlin* が2回（439, 516），*pantheress* が1回（527）登場する。3巻6章「ルイ・ムーア “Louis Moore”」の日記の冒頭部分でルイは次の様に語る。

[M]y patience would exult in stilling the flutterings and training the energies of the restless merlin. In managing the wild instincts of the scarce manageable ‘bête fauve,’ my powers would revel. . . . if [the hand] is feeble, it cannot bend Shirley; and she must be bent: it cannot curb her, and she must be curbed. (439)

そのルイの「御しがたい野獣を抑えたい」欲求に呼応するかのように，3巻8章「叔父と姪（“Uncle and Niece”）」の章において，シャーリーは結婚を巡る叔父との口論の中で，“I will accept no hand which cannot hold me in check. . . . a husband must be able to control me.”（461）とはっきり明言する。シャーリーはルイに制御されることを望んでいた。女領主と

して支配する立場にあるシャーリーは、ルイの下では支配される立場になるのだ。二人の主従関係は、前章で論じたシャーロットの創作活動における欲求と必要な抑制、すなわち「生産的制御 “productive regulations”」(Lon-off 75) を擬人化したものと思われる。シャーリーのエネルギーがルイによって制御されることは、シャーリーのルイへの屈服としてフェミニストらは否定的に捉えているが、作家と *genius* という主従関係を投影したものであると考えることもできるのだ。

### 3. エミリーとキーパーの関係

“*Shirley was Charlotte Brontë’s watershed.*” と評されるように、彼女は執筆中に相次いで3人の兄弟らを失い、嘆き悲しみの底から這いあがるようにして『シャーリー』を書きあげた (Gezari vii)。シャーリーのモデルはエミリーであり、二人の類似性は随所にみられるが、中でもエミリーの動物愛は顕著に描かれている。シャーリーが飼う犬はターターと呼ばれ、エミリーの愛犬であるキーパーをモデルとしている。ターターはマスチフとブルドッグの混血でとても大きな犬であり、シャーリーの腹心の友である。運送屋の二頭の犬と取組み合いになり、ぐるぐる回って噛みつきあっている三匹の犬の中にシャーリーが飛び込み、攻撃をやめない犬の首に両手を巻き付けてターターから引き離したエピソード (2巻9章「その翌日 “To-Morrow”」) や、飼い主から虐待され狂犬病の疑いがある雌犬のフィービーがシャーリーに噛みつき、その傷口をアイロンの熱で焼灼したエピソード (3巻5章「フィービー “Phœbe”」) も、エミリーとキーパーの間で実際に起こったとされている (Lutz 105; Gaskell 220)。

それにしても、エミリーが愛犬にキーパーと名づけたのは非常に興味深い。「番犬として見張ったり (*keep guard*)、守る (*keep safe*) 能力を示すからか。それとも頑丈な顎で噛みついたら放さなかったからか。あるいは秘密を守る犬だったからか。」(Lutz 98) など諸説あるようである。いずれにせよ、エミリーは頑固で獰猛な動物に惹かれ、「制御が困難な犬を躰けた

めには、自らが傷つけられるほど相手と闘わなければ愛情が足りない」(Lutz 106)と信じ、独特な手法で信頼関係を築こうとした。そのことを示すエピソードが、ギヤスケルが書いたシャーロットの伝記にある。エミリーは約束を守らずベッドに上がり家族を困らせたキーパーに対し、命がけで躰を行った。

[H]er bare clenched fist struck against his red fierce eyes, before he had time to make his spring, and, in the language of the turf, she “punished him” till his eyes were swelled up, and the half-blind, stupefied beast was led to his accustomed lair, to have his swollen head fomented and cared for by the very Emily herself. The generous dog owned her no grudge ; he loved her dearly ever after. (221)

制御不能の「飼い慣らされていない」犬を力づくで制御し、支配しようとするエミリーの荒々しい躰は、彼女が独特の方法で動物との友情関係を築くために必要不可欠であった。犬と主人が互いに制御し合い、時に上下関係が入れ替わる姿は、シャーリーとルイの主従関係の入れ替わりを示唆しているとも考えられる。

ルイの「野獸を抑えたい」欲求とシャーリーの「誰かに制御されたい」欲求が一つの単語となって表されているのが **keeper** である。物語の中に、**keeper** という単語が5回出てくるが、そのうち2回はシャーリーの飼い主、<sup>あるじ</sup>主という意味で3巻13章「勉強部屋で書いた事 (“Written in the Schoolroom”）」に登場する。語り手が引用したルイの日記において、ルイはヘンリーとのやり取りの中で自身について “. . . I have tamed his lioness and am her keeper (512)”と明言し、シャーリーもルイのプロポーズに応じて “‘I am glad I know my keeper, and am used to him. Only his voice will I follow ; only his hand shall manage me ; only at his feet I repose.’ (522)”と答える。

このようにして、支配されたい逞猛な雌ライオンのシャーリーと、それを飼い慣らす飼育者、つまり **keeper** としてのルイという構図はしっかりと足固めをされていく。しかし、自分自身の飼い主をやっと見つけたシャーリーは、その構図に反してルイのことをターターに似ているとも言う。小説の中ではシャーリー以外にターターが心を開く者はルイしかいない。人間が犬に似ることがあるとすればルイはターターだとし (519)、今度はシャーリーがルイを手なづけようとして “**Poor Tartar! . . . poor fellow ; stalwart friend ; Shirley’s pet and favourite, lie down!**” (523) と呼びかける。

どちらが飼い主でどちらがペットなのか、主従関係が逆転しているこの場面は非常に興味深い場面である。シャーリーの気紛れな性格が反映されているとも読み取れるが、一方でやはりエミリーとキーパーとの関係、支配し、される関係を暗示しているように思われる。シャーリーがルイを「ターター」と呼ぶことから分かるように、シャーロットはキーパーをこよなく愛していた妹エミリーのために、ターターのみならずルイもキーパーになぞらえたと考えられる。自然や動物を愛し、人と接するのが苦手であったエミリーが、ひょっとすると精神的にキーパーに飼われていたと想像することも可能であるならば、シャーリーとルイとの関係は、お互いがお互いにとって **keeper** (飼い主) であるという、エミリーとキーパーの関係、いつ何時相手から噛まれるか分からない、相互に支配され、支配する関係であるのだ。

## 結 論

フェミニズム批評では、ルイとシャーリーが結婚するまでの過程に、妥当性、説得力が無いと指摘され、ルイとシャーリーとの主従関係、服従関係が批判されている。ギルバートとグーバーは、シャーリーは父権社会の「女奴隷 “**bondswoman**”」に成り下がっていると批判した (395)。しかし実際のところ、シャーリーのことを作中で “**bondswoman**” と言っているのは他ならぬ控えめなキャロラインである。

“Whatever I am, Shirley is a bondswoman. Lioness! She has found her captor. Mistress she may be of all around her-but her own mistress she is not. (506)

抑圧されているがために、「抑え付けられたくない」と望むキャロラインに対して、財産と社会的権限を持つシャーリーの「抑え付けられたい欲望」はある種の上流階級の贅沢病であるかにも思える。常に決定権や発言力が与えられているシャーリーだからこそ、時には支配されたい、と欲することもあるのかもしれない。最終章では、シャーリーは結婚を延期していたが、とうとうルイに飼い慣らされることになる。語り手は次のように回想する。

Thus vanquished and restricted, she pined, like any other chained denizen of deserts. Her captor alone could cheer her. . . in his absence, she sat or wandered alone; spoke little, and ate less . . . Never was wooer of wealthy bride so thoroughly absolved from the subaltern part; so inevitably compelled to assume a paramount character. . . but. . . a year afterwards. . . . “Louis,” she said, “would never have learned to rule, if she had not ceased to govern: the incapacity of the sovereign had developed the powers of the premier.” (534-5)

シャーリーを自分の支配下にしたルイは、「結婚に際する一切の手配を指揮することになり、従属者の立場から否応なしに主人役に押し上げ」られ、一方シャーリーは拒食になり存在そのものが衰えかけていく。しかし語り手はすぐに、「ルイは、シャーリーが計画的に行動し、ルイを支配し続けたからこそ、統治することを覚えることが出来た」、というシャーリー自身の言葉を付け加えた。まるでシャーリーは従属と支配の駆け引きを楽しんでいるかのようである。

シャーリーとルイの精神的な繋がりとは、獐猛な野獣とその飼い主、という

関係に止まらず、シャーリーのモデルとされるエミリーと愛犬 **Keeper** との関係に象徴されるように、互いに **keeper** の役割を果たす関係、つまり支配し、支配される関係にあるといえよう。このようにして、シャーロットの創作活動における作家と **genius** の主従関係や、シャーリーとルイの主従関係は、支配する者と支配される者が入れ替わる可能性を示唆している。シャーロットは創作活動において、一方では **genius** に主人の座を奪われないように彼の情熱を手懐けつつ、もう一方では彼の創造力を羽ばたかせ、その支配下となる余地を与えた。本作品における飼い慣らされた動物の表象には、シャーリーとルイの、あるいは作家と **genius** の間にある流動的な主従関係が描かれているのだ。

\* 本稿は、日本プロンテ協会関西支部 2017 年大会（大阪電気通信大学）において口頭発表した原稿に加筆、修正を加えたものである。

#### 注

<sup>1</sup> Peter J. Capuano は『シャーリー』のマルキシズム批評及びフェミニスト批評、即ち労働者問題や階級・ジェンダーにおいてテーマが置き換えられていると見なす置換批評（displacement-based reading）は、表面的であると批判する。しかし、本論では支配する者とされる者との上下関係が入れ替わる点に着目し、置換批評の流れを人間関係の流動性にまで派生させた。

<sup>2</sup> 先行研究における **genius** の捉えられ方やその日本語訳が多岐に及ぶため、本稿では特定の日本語に訳さず、**genius** に統一した。

<sup>3</sup> *The Woman in the Attic* の 6 章 “Milton’s Bogey: Patriarchal Poetry and Women Readers” と 11 章 “The Genesis of Hunger, According to Shirley” はそれぞれギルバートとグーバーの論文が基となり、加筆修正されている。ギルバートは論文から一貫して「サタンの男性の詩神と女性との性的結合に “incestuous Byronic love story”（近親相姦のバイロンの愛の物語）が込められている」（378）という、ラディカルな主張を唱えた。一方、グーバーは論文においては、「イヴは神との性的幻想を抱き、 “the Godly male spirit” と呼ばれる Genius がイヴを救うために戦い、不滅性を与えたことに歓喜する」（18）と解釈するにとどまっているが、11 章においては「性的結合」に書き換えられ、「母なる自然の子が父なる死霊の領域へと攫われる『嵐が丘』的な神話が埋め込まれている」（394）という文面を加筆した。このように、フェミニズム批評の間でも、シャーリーの作文をめぐる解釈は微妙に異なる。

<sup>4</sup> *Early Writings of Charlotte Brontë* の翻訳において岩上はる子は、初期作品

の観点から *genius/genii* を「守り神」と訳している。

<sup>5</sup> ロノフによると、靈感、支配と *genius* の関係性について少なくともシャーロットは5つの *devoir* において扱った。中でも、ロマン派詩人ミルヴォワ (Charles Hubert Millevoey, 1782-1816) の「落葉」を分析したエッセイ “The Fall of the Leaves” (1843) において、詩人の靈感、本能のようなものを *genius* と呼んでいる (246)。なお、*Belgian Essays* の日本語訳において中岡洋と芹澤久江は、*genius* を単なる天才と区別するため、初期作品の影響も鑑みて「魔神」と訳している。

#### 引用・参考文献

- Alexander, Christine. *The Early Writings of Charlotte Brontë*. Oxford: Basil Blackwell, 1983.
- Argyle, Gisela. “Gender and Generic Mixing in Charlotte Brontë’s *Shirley*.” *SEL: Studies in English Literature, 1500-1900*. 35.4 (1995): 741-56. JSTOR. Web. 21 Sep. 2016.
- Brontë, Charlotte. *Shirley*. ed. Margaret Smith and Herbert Rosengarten. Oxford: Oxford UP, 2008.
- Capuano, Peter J. “Networked Manufacture in Charlotte Brontë’s *Shirley*.” *Victorian Studies*. 55.2 (2013): 231-42. JSTOR. Web. 15 Sep. 2016.
- Crosby, Christina. “Charlotte Brontë’s Haunted Text” *SEL: Studies in English Literature, 1500-1900*. 24.4 (1984): 701-715. JSTOR. Web. 13 Feb. 2017.
- Eagleton, Terry. *Myths of Power: A Marxist Study of the Brontës*. London: Macmillan, 1988.
- Gaskell, Elizabeth C. *The Life of Charlotte Brontë*. London: Oxford UP, 1951.
- Gezari, Janet. Introduction. *Shirley*. Oxford: Oxford UP 2008. Print.
- Gilbert, Sandra M. “Patriarchal Poetry and Women Readers: Reflections on Milton’s *Bogey*.” *PMLA*. 93.3 (1978): 368-382. JSTOR. Web. 20 Sep. 2016.
- Gilbert, Sandra M & Gubar, Susan. *The Madwoman in the Attic: The Woman Writer and the Nineteenth-Century Literary Imagination, Second Edition*. New Haven: Yale University Press, 2000. Print.
- Guber, Susan. “The Genesis of Hunger, according to *Shirley*.” *Feminist Studies*. 3.3/4 (1976): 5-21. JSTOR. Web. 20 Sep.
- Glen, Heather. “*Shirley* and *Villette*.” *The Cambridge Companion to The Brontës*. ed. Heather Glen. Cambridge: Cambridge UP, 2002. 122-147.
- Keene, Suzanne. “Narrative Annexes in Charlotte Brontë’s “*Shirley*.” *The Journal of Narrative Technique*. 20.2 (1990): 107-19. JSTOR. Web. 21 Sep. 2016.
- Lonoff, Sue. *Belgian Essays: Charlotte Brontë and Emily Brontë*. New Haven:

Yale UP, 1996.

Lutz, Deborah. *The Brontë Cabinet : Three lives in Nine Objects*. New York : W. Norton & Company. 2016.

シャーロット・ブロンテ初期作品研究. 岩上はる子訳. 東京：ありえす書房, 1990.

ブロンテ姉妹エッセイ全集－ベルジャン・エッセイズ. 中岡洋, 芹澤久江訳, 東京：彩流社, 2016.

モリエール. 『モリエール全集 第4巻』鈴木力衛訳, 東京：中央公論社, 1981.